

キャサリン・マンズフィールドの写実性

Realism of Katherine Mansfield

松田 理

Osamu MATSUDA

キャサリン・マンズフィールド（1888-1923）はニュージーランドに生まれ、教育を受けるため16歳でイギリスに渡り、以後イギリスで活躍することになった女流作家である。

彼女の作品において読者の目を引くもののひとつは、特異ともいえる写実性である。それは、情緒に満たされた凝集感のある写実性とでも表現すればよいであろうか。またそれは、日本人である筆者には不思議となじみ深く、同じく凝集感の高い写実性を発揮する日本の短歌を連想させる写実性でもある。その原因は彼女が育った自然環境にあるのではないかと思われる。なぜならば、日本とニュージーランドは同じ太平洋に囲まれた島国で、東京は北緯35度に、彼女が育ったウエリントン南緯36度に位置していることからわかるように気候、季節感等に共通性があるからである。

本稿において筆者は作品中に見られるキャサリン・マンズフィールドに特徴的な写実的描写を短歌におきかえることを試み、彼女の写実性が持つ短歌との親和力と自然環境が人間に及ぼす影響力とを証明する手掛かりとしたい。

このたび取り上げる作品はニュージーランドを舞台とした彼女の代表作『ガーデン・パーティー』である。この作品中の特に目を引く写実的描写を含む部分を示し、その部分に日本語による筆者の翻訳を付け、さらにその描写を筆者の拙い短歌に置き換えてみたい。

And after all the weather was ideal. They could not have had a more perfect day for a garden-party if they had ordered it. Windless, warm, the sky without a cloud. Only the blue was veiled with a haze of light gold, as it is sometimes in early summer. (p. 68)

結局のところ理想的な天気になった。注文したとしても、ガーデン・パーティーにこれほど申し分のない天気は得られなかったであろう。風もなく、暖かくて、空には雲ひとつなかった。ただ、初夏に時々あるように、青い空にうっすらと金色の霞がかかっていた。

風もなく
晴れ渡りたる夏空の
青き底にも潜む金色（こんじき）

As for the roses, you could not help feeling they understood that roses are the only flowers that impress people at garden-parties ; the only flowers that everybody is certain of knowing. Hundreds, yes, literally hundreds, had come out in a single night ; the green bushes bowed down as though they had been visited by archangels. (p. 68)

バラはといえば、自分たちがガーデン・パーティーで人々の心を打つ唯一の花であることを理解している

としか思えなかった。誰もが間違いなく知っている唯一の花なのだから。何百という、そう、文字通り何百というバラが一晩のうちに咲いていた。その重みで、木々は大天使が訪れたかのように頭を垂れていた。

咲き出でて
頭（こうべ）を垂るる薔薇の花
畏（おそ）るは気高き天使の訪れ

Against the karakas. Then the karaka trees would be hidden. And they were so lovely, with their broad, gleaming leaves, and their clusters of yellow fruit. They were like trees you imagined growing on a desert island, proud, solitary, lifting their leaves and fruits to the sun in a kind of silent splendour. (p. 71)

カラカの前ですって。それじゃカラカの木が隠れてしまうわ。あの木は大きな艶やかな葉と房のような黄色い実を付けていて、ほんとうに美しいのに。それは無人島に生えているかと思われるような木で、誇り高く孤独で、物言わず、一種壮麗ともいえる姿で葉と実を太陽にかざしていた。

カラカの木
名もなき島の陽光に
卑屈を知らぬ葉と実をかざす

But the air! If you stopped to notice, was the air always like this? Little faint winds were playing chase in at the tops of the windows, out at the doors. And there were two tiny spots of sun, one on inkpot, one on a silver photograph frame, playing too. Darling little spots. Especially the one on the inkpot lid. It was quite warm. A warm little silver star. She could have kissed it. (p. 74)

しかしこの爽やかな空気といたら。足を止めてみれば、空気というものはいつもこんなふうだったのかしら。かすかな風が戯れて、窓の上の方から後を追うように入ってきてはドアから出て行った。そして小さな木漏れ日が二つ射し込み、ひとつはインク瓶のうえに、もうひとつは写真を入れた銀の額縁にあたって、やはり戯れていた。かわいい小さな二つの木漏れ日。インク瓶の蓋にあたっているほうが特にかわいかった。それはとても暖かかった。小さな暖かい銀色の星であった。彼女はそれに口づけしたいほどであった。

そよ風の
窓から入りて鬼ごっこ
逃げゆく先は奥の部屋

窓ごしに
木漏れ日触るるインク瓶
蓋に宿すは白銀（しろがね）の星

There, just inside the door, stood a wide, shallow tray full of pots of pink lilies. No other kind. Nothing but lilies — canna lilies, big pink flowers, wide open, radiant, almost frighteningly alive on bright crimson stems. “O-oh, Sadie!” said Laura, and the sound was like a little moan. She crouched down as if to warm

herself at that blaze of lilies ; she felt they were in her fingers, on her lips, growing in her breast. (p.74-75)

玄関のすぐ内側に大きな浅い箱が置いてあり、その中にはピンクのリリーの鉢が隙間なく並べてあった。ほかの花はなかった。リリー以外の花はなかった — それはカンナリリーで、鮮やかな赤い茎からは鳥肌がたつほど艶めかしい、輝く大きなピンクの花が咲いていた。「うわー、セイディー」とローラは言ったが、その声は小さなうめき声のようだった。リリーの炎で体を暖めようとしているかのように彼女はうずくまった。その炎は指の中でも、唇の上でも、胸の奥でも燃えているように彼女には思えた。

目を射られ
恐れながらもかざす手に
燃え移りたる炎のカンナ

They were little mean dwellings painted a chocolate brown. In the garden patches there was nothing but cabbage stalks, sick hens and tomato cans. The very smoke coming out of their chimneys was poverty-stricken. Little rags and shreds of smoke, so unlike the great silvery plumes that uncurled from the Sheridans' chimneys. (p. 81)

それは全体がチョコレート色に塗られた、小さな粗末な家々であった。狭い庭先には、葉をむしられたキャベツの茎、やせこけた鶏、赤く錆びた缶以外にはなにも見えなかった。煙突から吐き出される煙までも貧困に打ちひしがれていた。小さなぼろきれのような煙は、シェリダン家の煙突からまっすぐに立ち上る、大きな銀の羽飾りのような煙とは大違いであった。

庭先に
やせ鳥遊ぶ苦（とま）屋から
途切れ途切れに夕げの煙

Wherever you looked there were couples strolling, bending to the flowers, greeting, moving on over the lawn. They were like bright birds that had alighted in the Sheridans' garden for this one afternoon, on their way to — where? (p. 85)

どこを見てもカップルが歩いていて、花の上にかがんだり挨拶を交わしたりしながら、芝生の上を動き続けていた。彼らは、その日の午後だけ、どこかへ向かう途中で、シェリダン家の庭に舞い降りた色鮮やかな鳥たちのようであった。— どこへ向かうというのだろう。

客たちは
色鮮やかな渡り鳥
集いて去りゆくガーデンパーティー

It was just growing dusky as Laura shut their garden gates. A big dog ran by like a shadow. The road gleamed white, and down below in the hollow the little cottages were in deep shade. (p. 88)

ローラが庭の門を閉めたころには、ちょうど暗くなりかかっていた。大きな犬が一匹、影のように走り過ぎていった。坂道は白く浮き上がって見え、坂の下の窪地では小さな家々が濃い翳に包まれていた。

夕闇に
青白き道うき上がり
過ぎゆく影は色失いし犬

たそがれて
坂道は白くうきあがり
ふもとの翳にひそめる苦（とま）屋

Here she was going down the hill to somewhere where a man lay dead, and she couldn't realise it. Why couldn't she? She stopped a minute. And it seemed to her that kisses, voices, tinkling spoons, laughter, the smell of crushed grass were somehow inside her. She had no room for anything else. (p. 88-89)

今彼女は、男が死んで横たわっている場所へ向かって坂道を下っていた。しかし彼女には実感がわかなかった。なぜ実感がわかなかったのだろうか。彼女はしばらく立ち止った。するとどういうわけか、交わしたキスの感覚、人々の声、スプーンの音、笑い声、踏みしだかれた芝生の匂がまだ体の中に残っているような気がした。彼女の心には他のことが入り込む余地がなかったのである。

終わりにても
鼻腔にのこる草の香は
踏まれし芝のガーデンパーティー

A low hum came from the mean little cottages. In some of them there was a flicker of light, and a shadow, crab-like, moved across the window.

低いくぐもった声が粗末な小さな家々から聞こえてきた。いくつかの家では、ちらちらと灯りが見え、蟹のように押しつぶされた影が窓をよぎった。

苦（とま）屋より
漏れくる声はくぐもりて
窓辺をよぎる拉（ひし）がれし影

以上のような写実的描写の特徴となる要素は、光、色、音、香り、触感である。そして、それらが醸し出す効果は多くの場合、孤独と悲しみである。また、薔薇、カラカの木、カンナといった植物は人間をも超越した、冒しがたい尊厳を持つものとして描写されている。それは西洋の文明にありがちな、自然と対峙し、隙あらば自然を征服しようと企てる人間の姿勢とは大きく異なっている。

キャサリン・マンズフィールドは、ニュージーランド生まれとはいえ、西洋の文化の中で育った白人である。その彼女の自然観と、自然と人間との関係についての認識が日本文化寄りに見えるのは、同じ太平洋の、似通った自然環境に育ったからだと推論しても的外れではないであろう。自然環境は、そこに育った人間の自然観のみならず、自然と人間との関係についての認識をとおして、人間の自己認識にも影響を与えと言

えそうである。

註

テキストは『THE WORKS OF KATHERINE MANSFIELD Vol. 3』本の友社 1990 を使用。本文引用はすべてこの版からであり、ページ数は、引用に続けて括弧に入れて示す。

Realism of Katherine Mansfield

Osamu MATSUDA
(English Literature)

Realism of Katherine Mansfield in her works is singular and outstanding in English Literature. And her realism is such that is familiar to the Japanese. So the author tried to put some parts of her work into Japanese tanka and found that her realism has some analogy with that of tanka. It led to a conclusion that whether one lives in Western culture or in Eastern culture, a natural environment in which one lives is likely to affect one's way of thinking, and people who live in similar natural environment are likely to have similar ways of thinking including self-recognition.